

新刊
紹介

"I love my books as drinkers
love their wine; The more I
drink, the more they seem
di·ine."

故酒詰仲男（文学部教授）著「土岐仲男詩集・人」京都・土曜会、A 6判九六頁、七〇部限定（非売品）

ボルネオ探究の壯図を抱きながら、昨年五月三十一日、喘息性心臓麻痺でなくなった酒詰仲男教授の遺稿詩集が、一周忌をひかえて、遺族と友人の愛情で出版された。幼時育てられた母方の姓をとって「土岐仲男詩集・人」と名付けられている。

二十五篇の詩に、住谷悦治総長の序と堀田由之助氏のあとがきが添えられ、要樹平画伯の装画でよそおわれた——心ある人の胸に抱かれ掌に温められるにふさわしい

清雅な詩集。著者は「花月風流の道（序に代えて）」で、「私は／私の生命の焰（ひ）が消えるまで／鉛筆をなめては／襲い来る激情の浪を／紙面にぶっつけるだけで／それでよいのだ」とさげんでいるが、先史学者としてすぐれた業績を挙げるかたわら、文字通り、襲い来る激情の浪を、鉛筆で紙面にぶつけたもの幾百篇のうちから、二十五篇を自選し生前に清書していたものである。

京都新聞（四一・五・二七）は「脈打つ秘められた詩魂」と題して、この詩集を、表紙の写真まで入れて紹介し、「先史学者としてすぐれた功績を残した酒詰教授の心の奥深くに秘められていた詩魂が、脈々と打つて胸を打つ。くつろいだ、気負わない静謐（せいひつ）の境地がうかがわれる詩集である。二つ三つ集録されている七五調の詩には、明治生まれの感傷があらわだが、それがかえって教授の人柄を懐しく思っておこさせる。」と評し、なお『生前に発表なすっていたら……』とは詩人山前実治さんのことだが、あえてそれをしなかったところに、明治生まれの酒詰教授のはにかみをみてとることもできよう」と述べて

いる。

二十五篇それぞれ快い色彩、香り、趣きに富むが、著者と同窓の私は「無題」と題された七五調を幾度誦したことであろう。「また逢う日まで／さちあれと／いのりしころまことなり……心の底に一すじの／潔き音と鳴る／よき君よ／その一条の楽の音に／生きぬく今のこのわれを／実なきものと言ふなかれ——」

住谷総長は序文で「あなたとひとそかに相通う心の時代があったのですね」と呼びかけ、「この詩集はきっと多くの親しい人びとが胸に抱いて大切にするに違いありません。いつまでも、いつまでも。」と陳べていられる。

著者の一周忌にあたり、その霊前にこの詩集が未亡人静枝さんの手によって供えられ、続いてその日集まった親しい人々の手から手へと渡され愛誦されたのであるが、著者はさぞかし会心の微笑を浮かべていることであろう。その日集まった酒詰家にあふれんばかりの人たちの面々には、それぞれ文学博士酒詰先生を偲ぶとともに永遠の文学青年土岐仲男君を慕う至情があふれて

いた。

(堀田由之助)

アメリカ経済研究会編『ニューディールの
経済政策』 東京・慶応通信社、A5判六
〇〇頁、定価一六〇〇円。

本書は、松井七郎博士を中心にした同志
社大学経済学部の子十三名の有志教授によつ
て四年ほど前から組織されている「ニュー
ディール研究プロジェクト」の研究成果の
一端を書物にまとめられたものである。

「ニューディール」のもとの一連の制度
改革と経済政策を理解することは、戦後の
アメリカ経済の制度的環境を把握するうえ
に決定的に重要であるといわれながら、わ
が国においては、これまで終戦直後の都留
教授や塩野谷教授の小冊子を除けば、ニュ
ーディールに関する包括的な研究はほとん
ど皆無の状態にあった。本書の存在意義
は、まずこの点に見出される。

当のアメリカにおいてさえ、かなり文学
的なシュレジンガーの三部作を別とすれ
ば、この期間の経済政策に関する最近の資
料と解釈をふまえた包括的概説書は未だに
存在していないのである。

本書は、また共同研究の威力をいかな

く發揮した一例といふことができるであろ
う。卒直にいつて、研究会の開始当時にお
いては、執筆者のほとんどはアメリカ経済
論の専門家とはいへなかつたのである。各

産業・公共事業・労働・社会保障・金融財
政および国民所得分析と政策思想に関する
各章の記述はかなり詳細にわたり、いくつ
かの章は概説書の境を超えた貴重な労作と
なっている。しかも、この種の共同研究に
不可避免的な執筆者間の視点と見解の整合と
いう難問題も一応克服されているようであ
り、おさえ気味の「序章」と「終章」には
その苦心のあとがうかがえる。また、巻末
の「年表」も重宝されることであろう。

本書が、今後、わが間におけるニューデ
ィール研究、否、もっと広くアメリカ経済
研究の貴重な「手引き」として珍重される
ことは疑いない。アメリカ史学界の元老が
本書を読了されて、『原典アメリカ史』の
一部修正の必要を感じた、と述べられたこ
とや、また最近になって、「日経センタ
ー」が本書を重要図書の一つに指定したこ
とがそれを物語っている。

しかしながらこの種の研究の前途は儼わ

しい。まず「アメリカ」の社会と歴史に関
する透徹した理解と一貫した観点が前提に
されていなければならず、しかもそのうえ
に、経済体制の世界史的動向についての明
確な判断によって裏付けられていなければ
ならない。このような意味において、将来
その出現を期待すべき本書の水準を抜く研
究には、歴史家と社会科学者の本格的な協
力が要請されるであろう。(XYZ)

「理工学研究報告—アラスカ学術調査」同
志社大学理工学研究所、B5判九十頁写真
七十八枚、非売品。

外貨獲得のあるいは寄付を受ける便宜か
ら「〇〇学術調査隊」と銘うった「登山
隊」が全盛をきわめてきた。専門の研究者
の一人もいない「〇〇学術調査隊」が横行
している。登山にいくのならはつきり「〇
〇登山隊」という旗をあげて力のこもった
魅力的な登山をしてくればいい。

そういうなかで真剣に学術的な調査と登
山の融合ということが一方ではむづかしい
問題として考えられている。

未知の地域での科学的な調査——これだ
けでも大変な仕事である。それに加えて未

踏峰に登るといふ仕事もこれに劣らぬ困難な仕事である。本報告はこの二つの要素をほぼ理想的なかたちで実現した同志社大学アラスカ学術調査隊（一九六四年）の報告である。内容は、一般報告と学術報告に分れており、一般報告ではブラックバーン峰（五〇三八¹）の第三登とリーガル峰（四二二²）の初登頂の記録が中心になっている。登山隊の多くは山岳部の学生であるが、一人の故障者もなく確実に頂上に立っている。後半の学術報告では、北村泰一副隊長の電波観測のデータ（写真六十四枚）と、西原正夫隊長のナスベスナ氷河の流動速度の測定をはじめ氷河の予備的調査の報告がある。いずれも未知の大氷河に多くの観測資材を持ち込んでの苦勞の多い仕事である。

大体この種の遠征には三つの段階がある。準備、調査登山、そして帰国後の報告——この報告は往々にして延び延びの立ち消えという場合が多い。本来の調査登山活動では十分な成果をあげ、さらにこのように立派な報告書としてまとめられたことに敬意を表する次第である。（前芝）

ルイ・カザミヤン著「象徴主義と英詩」岡本昌夫・竹園了元共訳
東京・松柏社、B 6判、本文三六〇頁、図版十一頁、定価八五〇円。

英文学に関心をもっているものであれば、本書の著者、元ソルボンヌ大学教授ルイ・カザミヤンの恩恵を何らかの意味で受けている。英文学史のテキストにもルグイとの共著「英文学史」がよく使用されているし、イギリスのローマン派詩の研究者にとっては、彼のグレイク、シェリー、ワーズワース、テニスンなどの研究は欠かせないものとなっている。

本書はそういう学者の手によるもので、十八世紀より現代にいたる英詩からの豊富な例を引いて、象徴主義の手法を明らかにしたものである。文学に興味をもっているものがよく「象徴主義」とか「象徴」という言葉を口にするが、しばしばそれは無難作に使っているにすぎない。著者はまず「象徴主義」というあいまいな術語の広義、狭義の両面から検討し、詩の手法としての「象徴主義」の意味を英詩を仏・独の詩と比較しながら論じている。そして、「人間が原始以来本能的に見出して、詩と呼んだ

芸術と美との特殊な様式」において、象徴主義の手法が「詩人に最も都合のよい表現法である」ことを明快に論じている。

原著は一九四七年の出版であるにもかかわらず、フランス語で書かれているため、わが国においてはまだ多くの読者をもっていなかったが、今回、わが国におけるコルリッジ研究の第一人者であり、カザミヤンをその晩年にパリに訪ねたことのある岡本昌夫教授と数少ないユイスマン研究者である竹園了元教授により、この好著がわれわれの手近なものになったことは誠に喜ばしい。英詩の良き参考書としてとともに、混乱している文学用語の再検討という意味を含めて、是非学生諸君にも一読をすすめた訳書である。

なお、原著名は *Symbolisme et Poésie, L'exemple anglais* である。（T・I）
M・L・キング著、中島和子（校友）・古川博己共訳「黒人はなぜ待てないか」東京・みず書房、B 6判二〇五頁、定価四八〇円。

この書はマルティン・ルーサー・キングの一九六四年の著の訳である。著者キング

牧師は一九六四年ノーベル平和賞を受けた著名な黒人である。日本人にとって、黒人問題というのはどの程度の現実性をもつものか、大きさも重要性も充分握みにくいところである。

この書はアメリカにおける黒人問題の意味を明らかにし、その解決の仕方を具体的に提案している点において明著と言い得る。次に少しくこの書で扱われている問題を紹介して見よう。

一九五四年に米国の最高裁は学校における黒人の差別撤廃の判決を下したが、それから九年たった一九六三年初頭には南部の学童の約九パーセントが人種統合された学校に通っていたに過ぎない。リンカーンが南北戦争によって黒人解放をしたが、それから百年たった今日でも南部では政治的にも社会的にも経済的にも、また心理的にも黒人は未だ日陰者にされていた。北部では問題は表面化するかせんかの境目に止まっていた。スポーツや芸術の領域では活躍できたが、高級官吏、教授、経営者の領域には門戸は閉ざされていた。

そこでこの黒人解放百年に当る一九六三

年に黒人問題指導者達は非暴力革命の計画を南部の差別の甚だしい諸都市で実施しようとした。種々の試みを経て非暴力の理念が黒人指導の頭脳の中で育っていた。それに大きい示唆を与えたのはインドのマハトマ・ガンジーたちの非暴力実践の理念であった。

一九六二年にジョージア州オルバーニーで何ヵ月も黒人はデモと投獄を繰返してしかも差別撤廃は不成功に終わった。

南部最大の工業都市アラバマ州バーミングハムはその人口の五分の二は黒人であるが、この町の市政委員会(当時市長制がなく三人の委員が町の行政官であった)のひとりユージン・ブル・コナーは白人至上主義者で、かねてから黒人に暴力と残虐行為を加えていた。

そして連邦政府に対して不遜であった。

一九五七年から六三年一月までの間に黒人教会や公民権指導者の家に爆弾が投込まれた事件が一七件もあり、市の公共設備には人種隔離が温存されていた。

一九六三年四月三日、南部キリスト者指導協議会(SCLC)全国有色人向上協会

(NAACP)、人権平等会議(CORE)学生非暴力連帯委員会(SNCC)、南部地域協議会(SRC)、及びあらゆる宗教宗派の指導者の協力の下に、アラバマ州キリスト者人権擁護運動(ACHR)の指導者フレッド・シャトルワース牧師は立ち上った。(この団体はキング牧師の指導する南部キリスト者指導協議会(SCLC)に属した。)

彼らは差別抗議運動(非暴力的)の参加者を募り、大衆大会において訓練した上に示威運動に操出した。この示威運動は一ヵ月間にもわたって続けられたが、市の警察隊は警察大をもって襲撃させ、一方高圧消火ホースを以て黒人の行進を防ぎ検束した。黒人の抗議理由は最高裁の学徒無差別の法律及び連邦政府直轄機関の人権擁護の統治方針に対する市当局の不服従に対する抗議であった。日が進むにつれて四百人から五百人の黒人は逮捕せられた。四月十二日には指導者たるキングもシャトルワースも人獄した。しかもその後、ケネディ大統領の助言によって出獄した。日が経つにつれて全国から市当局に対する非難は高まっ

た。そしてこの運動によって、コナー及び市当局は遂に黒人たちの人権と就職の門戸解放、賃銀の無差別を認めるに至った。

この書物は黒人指導者たちが二千万人の黒人を背景にして、その後全米的な運動を続け、しかも成功を収めた事実を確実な実例をもって明示している。極めて読みごたえのある書物である。共訳者の一人中島和子氏は同志大学法学修士であることを申添えたい。

(今谷)

今井新太郎(校友)著「貧しき歩み」

東京・キリスト新聞社、文庫判三六頁、定価五〇円。

日本の近代化のなかで、プロテスタントのになった役割がいろんな視角から再検討されている。現在は、社会福祉事業といわれているが、明治・大正・昭和戦前期には、それぞれ慈善事業・感化救済事業・社会事業とよばれてきた領域においてプロテスタントの遂行した仕事は実にめざましいものがあつた。そのなかでも、新島襄門下、同志社に学んだ人々の開拓した部分がとくに重要な意味をもっている。「貧しき歩み」は、そのような先覚の一人、今井新

太郎氏の自伝である。今井先生は、一八九一年(明治二十四年)四月に松山市に生まれ、一九一八年(大正七年)に同志社大学神学部を卒業、その後、松山で教職についたり、京都西陣教会の牧師をしたりして、一九二七年(昭和二年)にユニオン神学校に留学、帰国後、金沢教会を開設し牧師に就任されている。今井先生の社会事業への実践の場は、家庭学校である。家庭学校は、一八九九年(明治三二年)に、留岡幸助によって開設された、感化教育の施設であつて、石井十次の岡山孤児院や、山室軍平の救世軍の社会施設とともに、わが国の民間社会事業のもっとも開拓的で、すぐれた事業の一つであつた。今井先生は、家庭学校長であつた牧野虎次先生が、同志社にうつられることになり、その後任として一九三九年(昭和十四年)家庭学校長に就任され、今日まで、その経営・発展のために努力しておられる。「貧しき歩み」は、今井先生の多年の社会事業への貢献に対して、藍綬褒賞をうけられた記念に、自伝として執筆されたもので、三十六頁の小冊子である。序において「こころの貧しい人た

ちは、さいわいである、天国は彼らのものである。『貧しい者がはたして幸福なのであろうか』とするして、幼少年期よりの貧しき、祈りにみちびかれた同志社大学への入学、克己精励の学生生活、留学、帰国、家庭学校長への就任前後の事情、戦時、戦後にわたる家庭学校経営の苦しみなどが簡潔に叙述されている。同志社にゆかりの深い人々、徳富蘇峯、山室軍平、牧野虎次、安東長義、生江孝之らとの交渉なども記述されていて、家庭学校をめぐる人物像としても興味ぶかい。今井先生の「貧しき歩み」は、キリスト教社会事業とその実践、どのような生涯が、どのようなかたちで、一つの仕事をきりひらき、支えつづけてきたかをくつきりとしめしているように思う。現実の民間社会福祉事業、その経営の根柢をなにもとめるかという切実な問いにも、今井先生のこの著作は、多くの示唆をあたえてくれる。今井先生は、同志社大学人文科学研究所、キリスト教社会問題研究会についても理解と協力をしめされ、家庭学校所蔵の貴重な資料を多年にわたって研究会に貸与いただいていることを感謝をもつて付記したい。

(小倉)